

あ る け み ー
ALCHEMY



奈良工業高等専門学校
現代視覚文化研究会
2019年 春会誌



ALCHEMY

まえがき

はじめまして。新入生の皆様、ご入学おめでとうございます。現代視覚文化研究会、略して『現視研』の会長の「しゅう」と申します。

本日は2019年の春会誌「Alchemy」あるひみーをお取りいただきありがとうございます。ございます。いかがだったでしょうか？

さて今回は、こんな前書きにまで目を通してくださる酔狂な方のために、ちよつとだけ、この同好会についてのお話をさせていたただこうかと思えます。

「げんしけん」というワードを聞いて、皆さんはどんなものを想像しますか？ 私は、家族に部活を聞かれたときに、「え？ 原子？ 化学系？」などという見当違いな応答をされたことがあります。

実際には、現視研ではいわゆる『創作活動』というものを行っております。具体的には、小説、イラスト、音楽、ゲームの企画があつて、それぞれが個別で、または合同でいろんな作品を制作しています。また、必ずしもこの種類に縛られている必要はなく、部員たちのおもしろい手法・媒体で様々なものをつくっています。

ここの特徴を一言言うならば、異様にゆるいことが挙げられます。一応、基本的に平日なら毎日部室は開放しているのですが、毎日来る必要はありません。なんなら来なくても問題ありません。

部員にお手伝いしてもらいたいことは、月1回くらいのお会議への出席、会誌などへの作品の提出、イベントごとのお手伝いなどでしょうか。兼部余裕のホワイトぶりです。行事のない暇な時は、部員たちは部室で熱心にゲームに励んでいます。

……なにが言いたいのかというと、ここは、ゆつたりと創作活動をして、先輩や同級生たちと作品を見せ合い、お互いに高めあえる

環境であるということです。

ここで「創作活動なんかしたことねえよ……」と思ったそのあなた。全然問題ありません！ 現視研に入学したことをきっかけに創作をはじめられる人も思いのほか多いですし、なにか質問すれば親切な先輩がたくさんサポートしてくれます。

ちなみにですが、既になにか技術を持っている強い新入生は、入部して先輩にどんどんマウントをとりにいっても構いません。

最後に宣伝です。

現視研は「課外活動共用施設（体育館と凌雲館のあいだにある部室棟）」というところで活動しています。会費は前期500円、後期500円。ただし、新入生は体験期間ということで前分期が無料です。これはお得だ！

新入生歓迎会も実施予定です。まずはお気軽に、体験入部からでも問題ありませんので、ぜひ部室を訪れてみてください。

あとは、ホームページ (<http://mct-nvcc.sakura.ne.jp/>) もあります。ここでは、過去の会誌や作品を見ることができます。そして、Twitter (@mct_nvcc) もやっているので、ぜひフォローおねがいます。

以上、ここまでお読みいただきありがとうございました。

次のページからは、部員たちが丹精込めて作った小説とイラスト集になっております。最後までゆつくりとお楽しみください。それでは。

もくじ



Novel

- 4. 幕間 キツタヌ
- 5. 真と違えど嘘はなし えのぐふで
- 10. 崩壊した世界で生きる者 さん
- 13. 雨模様 さん
- 14. 平和のために…… タニイム
- 16. 望外の幸 タニイム
- 18. タクシー運転手の仕事 若葉

Illustration

- 22. シルフィイ
- 24. 篝火
- 25. さん
- 26. タニイム
- 30. あっごどん
- 31. Mino

Column

- 34. kuroma



表紙	さん
編集	タニイム
扉絵	kuroma





文
章
作
品



幕間

キツタヌ

懐かしい人を見た。

零れたのは言葉だったか溜息だったか。

聞き覚えのある声が聞こえた気がした。

思わず息を呑んだ。

感情が大きく揺さぶられた。

いつ、どこで聞いたのか、誰の声だったのかは、全く思い出せない。私は物覚えが悪いし、行動範囲は狭い。呼ばれたわけでもないのに声に反応出来るなど、私自身でもどうかと思うが本当に親しい友人ぐらいなのだ。その友人でもこんな心が揺れる事なんてない。

わけが分らないが、声の主を探そうと辺りを見ようとする
と途端に思わず蹲ってしまう程の頭痛が走った。

おや、と疑問に思った。

私は何故こんな場所で蹲うずくまっているのか。と――

感情なんてものがこんなに揺れたのは初めてかもしれない

あれから、どうやら無事に帰れたらしい。

初めて途中で、それも一幕目で帰ったキミ。

初めて出会ったタイプの人間だった、律儀に帰ったキミ。

初めて出会った賢者のキミ。

そう言えば、あれから一年か。そろそろここでは、また新しい周期を刻み始めるのだと聞いた。

あの時、俺が観客に捧げた演目は平穩の終わりだった。

平穩な一幕目だけで帰ったキミは破綻した道なんて歩まなくて良いし、歩くべきじゃない。だから、あの時の事は忘れている事を切に願う。賢いキミは、こちら側に堕ちて来る事なく、健全に、生きていくべきだ。

こんな事があるなら偶にはこんな雑用も良いかもしれない。

ああ、そう言えばあの時もこんな風に祈ったっけか。

俺たちを見ている存在なんて、居たとしても死神ぐらいたろうけど、何だっけ良い。

――彼の者が幸せでありますように――

了

真と違えど嘘はなし

えのぐふで

朝起きてからのラジオ体操は、今年で七十歳になる堺誠剛さかみまことにとつて一種の儀式のような日課だった。これを行わないと生活の歯車さかまが確実に狂ってしまうであろう事を、彼は誰よりも理解していた。

布団から起き上がってすぐ、3年前に亡くした妻の仏壇で手を合わせ、その後ジャージに着替える。堺はもともと汗っかきな人間なので、寝る時に着ていた服では中々外に出る気になれない。

着替えを終えると、顔を洗い、歯磨きを済ませる。鏡を見ると、しわだらけの自分の顔が目に入る。日に日に老いていく自分の顔を見ると少し憂鬱ではあるが、それと同時に少し気分が楽になる。ふと、にこやかに笑う妻の姿が浮かんだ。

「……」

物思いにふけるのもそこそこに、堺はリビングに置かれたラジオを持って、庭に出た。かつては家庭菜園を楽しんでいたが、そんな気力はどこかへ消えてしまった。花壇だけがむなしく放置された空間にラジオを置き、チャンネルを合わせる。軽く足踏みをして、地面が頑丈かを確認する。

そしてあの陽気な歌声とともに、朝の体操は始まった。

※

『あの凄惨な事件から今日で三十年が経ちました。今日は、今一度事件を振り返って——』

朝食を食べながら、小さめのテレビでニュースを見る。

最近の世の中はとても平和だ。大して大きな事件も起きないし、芸能人のスキャンダルも小さなものばかりだ。ネタに困ったテレビ局は、こんなにも昔の事件を今更引つ張り出す始末だ。わざわざ点

けたものの、堺はすぐにテレビを消してしまった。

ここ数年で彼の料理の腕前はずいぶん上がった。妻が生前に書いていたレシピ表には、十や二十ではすまないほど多くの料理が記されていた。余生の楽しみとしてのつもりが、いつの間にかすつかりはまっていた。たださすがに朝食は簡単な物で、白米と味噌汁を食べた。

朝食を食べてからは、何をするでもなくリビングのソファアに腰掛け、最近ハマっている数独を嗜む。

不意に、インターホンの音がした。玄関に設置されたカメラを確認すると、見覚えのない男の顔が映し出されていた。三十代半ばぐらいだろうか、ひげは小きれいに伸ばされている。

「……誰だ？」

『突然押しかけてすみません。私、日本総合放送の沢木と申します』
日本総合放送は、日本最大のテレビ局だ。尤も、他のテレビ局と同じで、ネタには困っているようだが。

『天下の日本放送が、俺のような老いぼれに何の用だ？』

『堺さんにお話を伺いたいことがございまして。詳しいことは中で話させていただけないでしょうか？』

『聞きたい事……俺は別にたいした事はしてないぞ。ここら辺で事件でもおきたのか？』

『いえ、そういうわけではありませんよ。最近でいえば』

「……何が言いたい？」

どこか違和感を感じずにはいられない沢木の様子に、堺は少し考え込む。黙り込んでいると、沢木は次の口を開いた。

『三十年前の連続殺人事件。本日はそのことについてお聞きしに来ました』

※

その事件は、とてつもなく悲惨な物であった。

都内連続殺人事件。被害者の数は、実に十三人に及ぶ。老若男女、様々な人間が殺害されたが、その遺体には全てにおいてある特徴があった。

それは彼ら彼女らの首から上が、まるつきり無い状態であったことだ。綺麗に切断された十三の頭は、未だに見つかっていない。

この事件の奇妙な点はそれだけではない。

殺された人間達は、その日以降に目撃証言のあった者が居たことだ。その発見された時刻は、いずれも夜中だった。

この不可解な事件を、当時のテレビは連日放送した。警察も総力をあげて捜査を行った。

だがしかし、三十年経った今でも、犯人は見つかっていない。

「警察の捜索も一応続いているんですが、もう犯人も死んだんじゃないかとか、ネットではいろいろ言われてますけどね。我々はどうしても真実を突き止めたいんですよ」

「ふん、ネタが無いだけじゃあないのか？」

堺は現時点で、沢木をほとんど信用していない。疑念に満ちた目を向け続ける。

「まあ、メディアとしてぶっちゃけて言えばそうなんですけれどね。平和すぎる世の中では、この業界は中々輝きません。スポーツライトを当てる影が無ければ、とてもじゃないがやってられない」

紺色のジャケットの内側から、沢木は一枚の写真を撮りだし、テーブルにそっと置いた。そこに映し出されているのは、晴れやかに笑うワンピース姿の少女。

「私の姉です」

「……ずいぶん昔の写真なんだな」

「そりゃあそうですよ。ここまでの写真しか無いんですから」

「……」

「これでお分かりでしょう。私がこの事件を追っている理由。姉を殺した犯人を、どうやっても突き止めたいんです」

沢木の笑顔はすっかり消え去り、真剣なまなざしが堺に向けられ

ていた。

「事件はこの辺りで起きました。堺さんは当時からここに住んでらっしゃったんですよね？」

深々と頭を下げる沢木。握りしめられた拳からは汗がにじんでいる。

「どんなことでも構いません。何か見覚えのあることがあれば、教えていただけないでしょうか」

「……」

しばらくの沈黙が流れた後堺はおもむろに立ち上がった。

「怖えなあ、人間の執着心つてえのは」

「堺さん……」

「ちよつと庭に出るか。俺の知ってる事、全部教えてやるよ」

顔を上げた沢木は、驚いたような顔をしていた。

「……何か、大事なことを知ってらっしゃるんですか？」

堺はタンズで何かを探しながら言った。

「ああ、知ってるさ。この事件の——全ての真相を」

※

「毎朝、ここでラジオ体操してるんだ。日頃の運動としては丁度いいぞ。やってみたらどうだ？」

いつのまにか、空は雲に覆われ始めていた。堺は倉庫からスコップを取り出して、朝方ラジオ体操をした辺りに来た。

「ほれ」

堺はスコップを沢木に手渡すと、地面を指さした。

「掘ってみな。そこに真実がある。」

「……写真でも入ってるんですか？」

「さあな」

少々の疑問を抱きつつ、沢木は地面を掘り始めた。スコップを突き立てた地面は少し固い。

「沢木、つて言ったな。あんた、奥さんはいるのかい？」

「ええ、いますよ。娘もいます」

「そうかい。俺は三年程前に亡くした女房が居たんだけだよ。いやあ怖かったさ。いつもビクビクしながら過ごしてたもんだ」

「はあ……」

簡単な話を交えつつも、地面は少しずつ掘り進められていく。

※

「……ん？」

順調に土を掘り返していたスコップが、何か堅い者に当たる感触が沢木に伝わった。その感触は一点だけでなく、そこそこに広い範囲にあった。

それが何かを確認するように、少しずつ掘り進めていく。

そして現れたソレの正体を見たとき、沢木は言葉を失った。

「……………」

そこにあつたのは、少し土を被った、十三個の頭蓋骨だった。

「塚さん、あなた……」

「おっと、誤解するのはやめてくれ。俺は全ての真実を知ってる。

けど、俺は犯人じゃない。というか、あんたの探してる犯人って奴は、もう一生見つからないよ」

「それって、まさか……」

塚は、少しだけ笑った。

「その通り。三十年前の殺人事件の犯人は——俺の女房だ」

※

「塚良子。旧姓は……なんだったかな。それはまあどうでもいい。

俺の女房は三十年前、十三人の男女を殺した」

「いや、正確に言えばそのときはまだ俺と良子は結婚していない。

俺達はあの事件の後に結婚したんだ」

「始めの始めから説明したいところではあるが、あいにく俺は動機とかはよく分からない」

「良子が十三人目の殺人を行ったその事件現場で、俺は偶然にもそこに居合わせた。その日は仕事終わりに遅くまで飲んで、結構遅くなつちまったんだ。ただ、あの姿を見たときには酔いなんか吹っ飛びしまったさ」

「ただその時、俺は犯人が男だと思っちゃった」

「分厚いコートに真つ黒なブーツ。それに手袋。それらをまとった人間の顔は——どう見たって男のものだった」

「三十代から四十代くらいの少し老けた男の顔。俺じゃ無くても男と思うだろうさ」

「ただ、確かに犯人は良子だ。だって、俺は見ちまったんだから」

「俺に気付いた男の顔が、ずるりと剥がされるところを」

「あいつは脳天から頭を掴んで、思い切り引き剥がしがつたんだ」

「その顔の下にあつたのは、なんとも美しい——殺されてもいと思う程に、美しい女だった」

「あの連続殺人鬼は、殺した人間の頭を切り取った後、その顔を被つて別の犯行に及んでいたのさ」

「ただあんたの姉さんみたいな、幼い子供の顔はさすがにサイズが合わなかっただろうけどな」

「さて、犯人の素顔を目の当たりにした俺だが、そこで一つ問題が起こった」

「あんな状況でも、男は男なのかね。あの美貌に、俺はすっかり惚れちまった。あの殺されそうなほどの美しさに、俺は心酔してしまつた。この女と一緒にになりたい、この手で抱きしめたいと思つた」

「しかしそれだけじゃない。問題はもう一つある。それはあいつも、俺に惚れちまったって事だ」

「普通に考えたら、自分の犯行現場を目撃された状態で、素顔を晒すようなマネをするのはおかしいよな。まああそこで恋に落ちてし

まう辺りも、あいつが殺人鬼たり得る異常性の一端ではあったがな」「こうして運命の出逢いを果たした俺たちは、めでたく結婚することにした。事件の隠蔽と、一生の黙秘を条件に」

「それからだ、俺が朝からラジオ体操を始めたのは。被害者の顔を埋めた土を、毎日毎日踏み固めてたよ」

「結婚生活は怖いと言えは怖かったよ。惚れたとはいえ、相手は殺人鬼。一緒に生活していても、いつか自分は寝込みを襲われて殺されるんじゃないか。あの被害者達のように、顔を綺麗に剥がされるんじゃないのか。途中からは気にしないようになったが、結局いつも心のどこかで、殺されることへの恐怖心はあったんだろうな」

「ただ、恐怖と同じくらい、俺たちの生活は幸せなものだった子供は作らなかったが、二人でいるだけでどうしようもなく幸せだった。それもまた真実だ。だから良子が死んだとき、俺は本気で悲しくなった」

「俺と一緒に生きていたのは、恐怖の連続殺人鬼じゃない。愛する女房、堺良子だった」

「話が少し脱線したかな。これが三十年前の事件の真相だ。さて、あんたはどうする？ 良子はもう死んだ。あいつを匿った俺を殺すかい？」

※

辺りはすっかり暗くなり、街灯もともり始めている。仕事を終えた会社員、遊び疲れた子供達、買い物帰りの老人。様々な顔が辺りに現れる。

「……ありがとうございます。ありがたい話を頂けました」

「堅いなあ。そうでもしないとやってられないってか？」

「……仏壇だけ、見せていただいていいですか？」

「ああ、いいぞ」

くらい家の中に、鐘の音が鳴り響く。写真に写る女性は、にこや

かな笑みを浮かべている。

「今日で三回忌なんだ。時が経つのは早いもんだ」

「……ここからは、記者ではなく、個人としての意見です」

合わせた手を離し、沢木は静かに口を開く。

「俺は良子さんを、そしてあなたを許すことはできない。どうかあがいたって、これからの人生であなた方を許せるようになるほどに、俺は出来た人間じゃ無い」

「ああ、許して貰おうなんて思っちゃいけないさ」

「ただ、これを今更公表したところで、事は何も変わらない。この事件は三年前に、もう完結したんです。だからこれは、俺のただけで留めます」

「……そうかい」

「そろそろ帰ります。今日はありがとうございました」

支度を手早く済ませ、沢木は玄関へ向かった。廊下は真つ暗だが、電気は点けない。

「それでは、また縁があつたら会いましょう」

「あ、ちよつと待ってくれ」

靴を履いて立ち上がった沢木に、堺から声が掛かる。

「あと一つだけ、あんたに聞きたいことがある。これは俺にも全く分からないことだ」

「……なんででしょう？」

「俺は約三十年間、良子と暮らしてきた。老いていく過程を見てきたし、いろんな表情を見てきた。でもな、変わっていくその顔は、あくまで一つの顔だ」

「……」

「顔を変えて人を殺してきたあいつの最後に見た顔は、本当にあいつの顔なのか？ というかそもそも、俺と過ごした堺良子は——本当に堺良子だったのか？ あいつもまた誰かに殺されて、誰かに成り代わられていたんじゃないのか？」

空を覆っていた雲は、どこかへ消えてしまった。きらびやかな満

月が、夜空に浮かんでいた。

「……それは、私に分かることではありません。ずっと一緒にいたあなたに分からないことが、会ったこともない私に分かるはずがありません」

「……そうだな。すまん、変な事を聞いた」

「でも」

沢木は、優しく微笑んだ。

「それは別に、知らなくても良いことなんじゃないんですか？ あなたが愛したのは、あなたと過ごした堺良子さんなんでしょう？」

語られることの無い真実。そこに人はどれほどの価値を見いだすのだろうか。知の取捨選択は、いつだってどこでだって、どんな人にも迫られる。

「僕は思うんですよ。嘘だろうが真実だろうが、自分が信じたそれこそが、その人にとっての本物なんだと」

夜は、まだ更ける。

了

崩壊した世界で生きる者

さん

弓に矢を番え、息を潜めてじつと待つ。狙われているとも知らずに、獲物は徐々に近付いてくる。まだだ。もう少し。弓を引き絞り、狙いを合わせ、獲物の視線が別の方を向くのを待つ。

——今だ。顔を動かした瞬間、足の付け根を狙って矢を放つ。見事獲物の足に命中し、狙い通りバランスを崩して転倒する。すぐに起き上がり、逃げようとするが——その一瞬の隙で十分だ。

「よおーし。上出来、かつ十分な戦果だ。今日は中々幸運だな」

仕留めた獲物を担いで、すぐ近くの廃墟の草木が少ない場所へ出る。森の中はやべえ奴らばかりで、奴らにとつては俺と今運んできたこいつとに大差はない。

が、どうやら（コイツも含めて）森の中の奴らは廃墟の中に入ってくる事はあまりなく、しかも植物があまりない場所には一切近付かない。血の匂いに引き寄せられる可能性はあるが、森の中にずつといるよりもはるかに危険が少ない。なら、拠点として有効活用させてもらうしかないだろう。

「さて、これではばらくは肉には困んねえな。問題は水だな……」

解体しながら、一人で呟く。

そう。ここ十日間ほど全く雨が降っておらず、水を溜められていないのだ。今ある分はもってあと一、二日だろう。森の中には水が溜まっている場所もあるが、大抵やばい奴らの縄張りの中にある。それは流石に危な過ぎるので、雨を大量に確保し、保管していたの

だが……

「全く。人つてのはやっぱり信用出来ねえよなあ……」
解体し終わった肉を、軽く火を通しつつ乾燥させながらぼやく。

つい最近、今拠点にしている廃墟の側にあつた集落に訪れ、余つていた獲物の角や皮と、色々な物：今使っている短剣や弓と交換してもらつたのだ。それまで使っていたのはガタが来てて、使いにくくなつてたからな。そこまでは良かったのだが、なんと奴らは俺が留守の間に、拠点から何もかも奪つていきやつた。しかも、奴らはその後、集落ごと全員で移動したのか、集落はもぬけの殻だつた。

まあ、その集落に残つてたまだ使えそうな物や、うっかり忘れか、持ちきれなかつたかで置いていつた保存食とか、貯水池に僅かに残つた水とかを頂いてはいるのだが。

「まあ、こんなぶつ飛んだ世界なんだし、自分達が生き残るのを優先するのはそりや当然なんだがな」

肉を乾燥させつつ、獲物を狩る前に取つておいた木の実を食いつつ、独り言を続ける。

今生きている連中は誰も知らないくらい昔に、世界は変わつちまつたらしい。

だが、昔の事なんてどうでもいい。今のこの世界は大地が空を飛び、その遙か下に一切陸のない海が広がり、空は常に雲に覆われている、生きるか死ぬかの世界だ。昔話の大半は役に立たん。役に立つのは知識と技術、それくらいだ。

「……ああ。やつぱり、一人で生きていく方がいいな。要らんもんと関わる必要がないのは気が楽だ」

もう暗くなってきた。今日は寝て、明日近場に水場がないか探しに行くことにしよう。集落の連中に全部持ってかれたせいで、いつも使っていた毛皮を大量に使った布団がないからか、その夜はかなり寒かった。

「……………」

翌日、目が覚めてから、予定通り水場を探しに行こうと廃墟を出発しようとしたら、何故か年端もいかねえようなガキがいた。しかも、髪はのびし放題でボサボサ、服はボロボロだし、目は死んでやがる。俺の姿を見ても一切反応しねえし、近付いても逃げようもしねえ。さて、どうしたものか。これがまだ生きようと足掻いてるようなやつだったなら、軽く追っ払うだけで済んだのだが……

「……ああ、くそ。しゃあねえなあ……」

ひよいとガキを担いで、廃墟の中の拠点に向かう。ちよつとは驚くかと思つたが、全く表情が変わらねえ。むしろ軽すぎたせいで俺が驚いたくらいだ。

「ほれ。どうせここんところろくに食ってねえんだろ？大したもんじゃねえが、これでも食ってろ」

そう言いつつ、ガキに昨日取ってきた木の実を渡す。すると、ガキは驚いた様子もなく、じつと俺を見つめてくる。可愛げのねえガキだな。

「……殺さないの？」

「あ？」

最初に言う言葉がそれかよ。てか、案外驚いてんじゃねえか。しかも結構綺麗な声してんな、おい。

「別に殺しても俺に何も得ねえじゃねえか。人を食うほど落ちぶれてもいねえしな」

「……………」

「あとはそうだな。俺も一時お前みたいな目えしてたからな。それが気になったってだけだ」

腰を下ろし、ガキに渡したのと同じ木の実を食う。そんな俺の様子を見てどう思ったのかは全く分らんが、ガキも俺の正面に座って、木の実を食い始める。

どうやらろくに食ってなかったのはその通りだったらしく、すぐに夢中になって凄勢いで食っていく。そんなんでもガツツいてるって感じじゃない辺り、このガキ結構大事にされてたのかね？

「で、お前はあんどこで何やってたんだ？ 大方、住んでたところが獣に襲われて逃げてきたとかだろうけどよ」

ガキが食べ終わる頃を見計らってそう問いかける。俺が生まれた集落もそうやって滅んだのだし、そんなのだろうと思つたのだが――

「……獣じゃない」

「……あ？」

まさか、と思うが――

「……人」

「……………」

やっぱりそうか。人同士で争つても大して得もしねえし、むしろ損することばっかだつてのに、馬鹿なことやったもんだ。

……そういや、このガキを見つけた所は、方角的にちょうどあの集落があつた方向だったか……

「そうか。……お前んとこの連中で、生き残つたやつはお前以外にものいるか？」

「……多分、誰もいない」

「……そうか」

恐らくだが、俺から色々奪っていったあいつらが、移動した先で俺と交換した角やら皮を活用して襲撃したのだろう。角はいい武器になるし、皮は上手く扱おうと道具にもなる。そうやって調子に乗った連中は手に負えん。だが、排他的で暴力的な集落は必ず自壊する。敵意を向ける相手がいなけりゃ、身内に向けるしかなくなるからな。

しかし、寝覚めの悪い話だぜ。俺があいつらと関わってなければ、こいつの集落も襲われる事もなかっただろうによ。てかあいつら、このガキが逃げてきた事知ってるのか？知ってたら、間違いない俺のところに来るだろうな…大勢で。だったら、俺もさっさと逃げるのが身のためか。

ちようど、今は荷物も少なえしな。

「……お前、俺と一緒に来るか、って言われたらお前は どうする？」

「……………」

やつぱり何考えてんのか全く分かんねえなこのガキ。ちつとも表情が変わんねえ。色々あつたせいで、感情が出ていなくなってるだけなのかは知らねえけどよ。

「いきなりこんなこと言われても領けねえだろうけどよ、まあ俺にも色々と思う所があつてな。あと、俺はお前の集落襲った連中とは全く違うからな。それだけは断言しといてやる」

「……………」

黙ったまま、何の反応もねえ。ま、さつき人に襲われたばつかで、他人を信用しろつても無理な話だがな。どうすりやいいのかわよく分からんが…まあ、覚悟を決めるしかねえか。

「んで、どうする？お前一人で生きていくか、俺と一緒に来るか」

「……一緒に、行く」

「……よし。なら、さっさと行くか。ちよつと準備するから待つてろ」

相変わらず表情の変化もねえし、可愛げもねえが…目は、多少ま

しになったな。

「おう、待たせたな。それじゃ、行くぞ」

荷物を背負い、そう言いつつガキを片手で抱える。ホント軽いなこいつ。

「……………」

抱えたら真下から猛烈な視線を感じた。超至近距離から見上げられるつても新鮮だな。んで、ガキのこの反応は…驚いてる、つぼいな。多分。

「お前みたいな体力も残つてねえ、森ん中の歩き方も分かんねえやつを歩かせたりするかよ。そつちの方が面倒だ。軽く休ませてやつからの方がいいんだろうが、できるだけ急いで移動したい。だから今は、それで我慢してくれ。後でちゃんと休ませてやるからよ」

今の説明でどう思ったのかは知らんが、恐る恐る、つて感じで俺にしがみついて、そこからちよつとしたら静かに寝息を立て始めやがった。大分疲れてたんだろうが、俺もずいぶん信用されたもんだな。

「まあ、その信用を裏切る訳にもいかんよなあ…：しかし、一人の方が楽だ、なんて言つといてこのザマか……」

昨日の俺が見たらなんと言うだろうか。ま、このガキを見捨てんのも気分が悪いし、たまにはこういうのもありだろう。

そんな事を思いつつ、俺は今まで拠点にしていた廃墟から出て行ったのだつた。

雨模様

さん

崩れたコンクリート達は、音を聞き続けていた。
ぼつぼつと、ぼたぼたと——音は、なり続ける。

——ぼつぼつと、音がする。やがて音はざあざあと変わっていくが、いつかはあつたであろう雑踏はどうに存在せず、どれだけ音がなってもそれを聞いているのはぼろぼろに壊れたコンクリート群だけである。——本来なら。

音の中を歩くものがある。それは自らに降りかかるものなど気にもせず、ただ当てもなくさ迷っているようにも、確固たる意志をもつて突き進んでいるようにも見えた。

やがてその歩みは崩れながらも、原型をある程度留めている建物の前で一旦止まり、直ぐに建物の中へと歩いていった。

それが中に入った頃、外の音はごうごうとなりだした。建物の中では、所々でぼたぼたと音がした。それでもそれは歩みを止めることは無く、階段を登っていく。

階段を登っていくと、まだ天井が残っている場所で崩れて登れなくなっていた。そしてそこには、それとよく似た姿をしたなにかがいた。

偶然それらが出会ってから少しすると、ごうごうとなっていた音はもうぼつぼつという音に戻り始めていた。

そして、それらが出会った場所では、なにかがぼつんと立っていた。それが最初からその場にいたものなのか、登ってきたものかは、それにしか分からない。

それはその場に立ち続けていた。その目の前には、ぼたぼたと音を立てる赤い液体が流れていた。

平和のために……

タニイム

……一目見て、『彼女』を美しいと思った。こんなバカなことは今すぐやめて、彼女に思いを伝えたかった。

でも、それはできなかった。運命つてのは、どこまでも残酷なものさ。俺たちは、互いにもあまりにも多くのものを背負わされていた。

そりゃあ、俺だって出来る事なら投げ捨てたかったさ。だが、周りがそれを許してくれなかった。

『そこ』にたどり着くまでの間に、世界のすべてを見たって言うても過言じゃない。愛おしいと思える出会いもあれば、くそみたいな出会いもあった。

始めは信頼していた仲間達も、死に別れたり、戦いについていけなくなったり、愛して、恋して、守るものが増えたり、考え方が食い違ったり……いろいろな理由で離れていったよ。

結局、最後に『そこ』にたどり着いた時には俺一人になっちまっただ。

……俺？ ああ、言い忘れてたな、俺は『勇者』そして、『彼女』は『魔王』と呼ばれていた。

……『彼奴』が守りを破り、『ここ』にあらわれたのは、あまりにも突然のことだった。

『彼奴等』が、『ここ』に来る事自体は当然のことだが、驚いたことに、『彼奴』はたった一人で『ここ』までやって来おった。

そんな『彼奴』を見たときに、妙な愛しさを抱いたのを覚えてい

る。
叶うならば、この身にかけられた枷など、『世界』から押し付けられた罪など、全て投げ捨てて、思いのたけを叫びたかった。そんなこと、出来ようはずもないがな。

いままでに、偉大なる父祖も、尊敬する先達も、愛おしき民草でさえも、みな殺されていった。我が頼りにしていた家臣たちも、我を守るためにその命を散らしていった。

奇しくも今『ここ』におけるのは、『運命』に踊らされた我と『彼奴』ただ二人になっちゃったわけだ。全くもって数奇なものだ。

……我？ ああ、言い忘れておったな、我は『魔王』そして、『彼奴』は『勇者』と呼ばれておった。

「やあ。ごきげんよう」

……驚いたかな？ ……僕が誰かって？

多分きつと誰でもないから、気にしなくても良いと思うよ。

君達が観ていたのは『勇者』と『魔王』が争うよくあるテンプレートなファンタジーというやつの中のほんの一部だよ。

世界からの強制力で出逢い、傷つけ合う定めである両者の、ごく僅かな瞬間の感情を再現したものさ。

彼等はこの後どうなるのか、それは今の僕には全く解らない。おまけに、次の一瞬が訪れるのがいつになるのかすら不透明だ。

だから今回はここまで、僕としても続きは気になるところだけど、何もできないんだから仕方がないかな……。

ともかく、彼等がたどる道は、もうエンディングを目前に控えているけれど、だからこそさまざまな可能性に満ちている。

次に貴方達と僕が出会う時、それはきつと彼等が何かしらの結末を手にした時、なのだろうね。

また会えることを祈っているよ。それでは、そろそろ元のところへ帰ったほうがよさそうだな。

さようなら。またいつか、会えると楽しいかもね。

了

望外の幸

タニイム

気がついた、どうやら意識が途切れていたらしい。しつかりと覚醒させて状況を確認する。

たしか、いつもの嫌がらせで回ってきた書類の確認作業中だったっけ？少しずつ意識を失う前のことを思い出してきた。そこでようやく机の上の惨状を認識した。やってしまった……今となってはどのような人の書類かはわからない、むしろこの失敗で嫌がらせが増えることのほうが辛い。とにかくなるべくはやく謝罪しなきゃ。

「ご、ごめんなさい！」

若干失礼なことをまともに回っていない頭で考えながら、久しぶりに出したにしてはまともな声で伝えた謝罪に、相手は驚いた様子で振り向いた。今更だが、謝るのなら相手の正面に立つのが普通なような……。

「どうしたの？」

そうたずねる彼の声は、どこか優しく私を包み込んでくれて、気がつけば泣きながらこの場所についてや自分のこと、こういう状況になった時の説明事項などを話していた。話し終わった後、何か言われるかもしれないと少し身構えていたのだけれど、何も言われなくて少し安心していたらまた意識が途切れるような感覚に襲われた。今の状況を考えると彼に倒れこむことになって……。

「う、うーん、あれ？」

気がつくのと優しい暖かさを感じるベッドの中にいた。

「大丈夫？」

「ふえっ？ えーと、あなたはあのときの……」

不意に聞こえた声に少し驚いてしまい、おかしな声が出てしまった。この人は確か私のせいで転生することになってしまった……
「起きてすぐだけど、おなかすいてない？ おかゆ作っているけど食べる？」

くきゆるるゝ

次いでかけられた声に対して私の身体はとても正直に反応した。

……私の意思を無視して。

「い、いただきます」

「どうぞ、めしあがれ」

とても恥ずかしい、顔が赤くなっていないだろうか。……多分赤くなっているんだろうな……と思いつつ、彼がつくつてくれたであろうおかゆを食べ続ける。

「ごちそうさまでした」

カラツ

気がつけば手渡された器は空になり、私の目には彼の微笑む顔がうつる。

「お粗末様でした。おいしそうに食べてくれてうれしいよ」

「あううう」

多分今の私の顔は真っ赤に染まっているだろう、おもわず照れ隠しに彼のことを叩いてしまったが、それすらも微笑ましいものでも見るような顔で受け止められる。

しばらくして、落ち着いてきた私は普段仕事で使っていた机に目を向けた。

「……あれっ？」

机の上に載ってあったはずの仕事は、きれいに片付けられていた。

「今まで大変だったでしょ？」

彼がそうたずねる。

「ありがとうございます」

自分がやらなくてはいけない仕事をさせてしまったことに、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「気にしないで、だいじょうぶだよ」

彼はそう言って、私になぜこうなったのかたずねてきた。

自分でもよくわからないが、私の心はすでに限界を迎えていたのかもしれない。気がつけばただひたすらに何があつたのか彼に話していた。

話し終わってしばらくすると、彼は

「心配しないで、僕が君を守るから」

そう言って、一つの箱を取り出した。

「ふえっ？」

全く、驚いてまたおかしな声が出てしまった。これでも神として日々活動していたのに、なんたる不覚……。

「貴女のが好きです。年齢的にまだ早いけれど、これを受け取ってもらえますか？」

そんなことを考えている間に、彼が開きながら差し出した箱の中には、キラリと小さな輝きが一つ。

これは……つまり、そういう、こと、でいいのかな？

突然のことに戸惑う頭を置いて、私の口は勝手に言葉を発していた。

「はい、喜んでお受けします」

……確かに彼のことは嫌いではないし、むしろ好き、かもしれないけど、突然のことにまだ状況を完全に飲み込めてはいない。けれども、これだけはわかる。

私と彼の甘く、幸せな日々は、まだ始まったばかりだということ
は……

タクシー運転手の仕事

若葉

俺はしがないタクシー運転手だ。

小さい頃から車が好きで、免許を取ってからは毎日運転していた。タクシー運転手になって、運転が仕事になってもその気持ちは変わらなかった。

タクシーを利用する人は、そのほとんどがサラリーマンだ。外回りをしている人や、飲みに行く人が利用する場合が多い。

そんなタクシーだが、変わった客も存在する。今回は、その中でも印象に残った客を紹介しよう。

平日の昼間。眼鏡をかけ、スーツを着ている真面目そうな男性を乗せているときのことだった。バックミラーを見ると、男性は手帳に何かを書き込んでいた。仕事に関することだとすれば、なんとも真面目なものだ。

ふと、男性の隣に一人の少女が座っていることに気づいた。男性を乗せたときはいなかったと思うが……男性は気にしていないようなので、始めからいたのだろう。

少女はニコニコと笑いながらこちらを見ている。俺なんかを見ても何も無いだろうに。

しばらく車を走らせ、目的地に到着した。男性から運賃を受け取り、ドアを開ける。男性は軽くお礼を言い、足早に去っていった。

ふとバックミラーを見ると、先程の少女が車内に残っていた。

「お嬢ちゃん、降りないのかい？」

そう言いながら後部座席を見るが、誰もいなかった。慌ててバックミラーを見ると、少女が座っていた。混乱する俺に、鏡に写った少女が話しかけてきた。

「お兄さん、私を送ってくれないかしら？」

再び後部座席を見るが、やはり誰もいない。バックミラーに写る少女に

「お金はあるのか？」

と問いかけると、少女は五百円玉を取り出し、座席に置いた。後部座席を見ると、五百円玉がポツンと置いてあった。

「どこまで？」

お金があるのならお客様だ。少女へ行き先を尋ねると、

「後で言うわ」

とだけ言い、バックミラーからも姿を消した。

ふと窓の外を見ると、二人の男性がいた。一旦少女のことを頭の隅にやり、ドアを開けた。二人の男性はどうやら同僚らしい。目的地を言うと、二人で談笑を始めた。俺は目的地に向けて車を走らせる。

赤信号に合わせて車を止める。助手席にいつの間にか少女が座っていた。しつかりと肉眼で見えることに驚いたが、少女が人差し指を立てて

「シー」

と静かにするジェスチャーをしたので、声には出さなかった。

二人の客を送り、料金を受け取ると、再び少女が話しかけてきた。

「私の家まで送って欲しいの」

「場所は？」

「ここ」

少女はどこからか取り出した地図の一角を指さした。

「(信号にもよるが、五百円で行けないことはない、か)」

信号待ちの時間だけ料金が嵩んでしまうが、ここからだとなつぽどしかないの、たぶん問題ないだろう。

「わかった。一応シートベルトはしとけよ」

「はい」

少女がシートベルトを付けたのを確認して、車を走らせる。

その道中、気になったことを聞いてみた。

「ところで、お嬢ちゃんはいつから乗ってたんだ？」

「眼鏡のおじさんが乗った時だよ」

あの真面目そうなサラリーマンのときか。

「あの人たちにはお嬢ちゃんが見えてなかったみたいだったけど、
とうるか俺も最初はバックミラーでしか見えなかったけど、お嬢ちゃんは何者なんだ？」

「たぶん幽霊だと思う」

「たぶん？」

「気が付いたら知らない病院にいたんだ。でも、誰も私に気付いてくれないで……で、とりあえず家に帰ろうと思って、この車に乗ったの」

「俺が気付かなかったら無賃乗車じゃないか」

「幽霊の、しかもこんな子供から賃金を取るの？」

「それが仕事だからな」

「ふーん。ケチだね」

ケチとはなんだ。ガソリン代とか馬鹿にできないんだぞ。

「じゃあ、なんで今は肉眼で見えるんだ？」

「それこそ知らない。他の人は見えてないみたいだけど」

「そうだな」

「お兄さん、霊感強いんじゃない？」

「それは……嬉しくないな」

「私は嬉しいな。だって、気付かれなかったら送ってもらえないし」

「俺が気付かなかつたらどうするつもりだったんだ？」

「そこまで考えてなかった。たぶん歩くんじゃないかな」

「まあ、歩いていけない距離じゃないが」

そんな話をしている間に、目的地に着いたようだ。

「たぶんここだと思うが……」

「何も無いね」

アパートでも建ってたのか、というくらい敷地が広がっていた。

「ここで間違いないのか？」

「うーん。アパート暮らしたたのは間違いないけど……あまり周りの景色とか覚えてないなあ」

「そうか」

俺は窓を開け、通りかかった人に訪ねた。

「すみません。ここって以前何が建ってたんですか？」

「ここ？ 確か、二階建てのアパートだったわ。二年くらい前から、火事で燃えちゃって、取り壊されちゃったの」

「火事、ですか？」

「ええ。タバコの不始末が原因だね。それで、女の子が一人死んじやったのよ」

「女の子、ですか」

「ええ。当時中学生だったんだけどね。風邪で寝込んでたから、逃げられなかったそうよ」

「そうですか……ありがとうございます」

お礼を言い、窓を閉める。隣で聞いていたであろう少女は俯いていた。

「大丈夫か？」

「うん。たぶん、その女の子って私の事だよ」

「ああ……それで、どうするんだ？」

「ここで降りるよ。お金ないし」

「もし行く宛があるなら送ろうか？ 料金は俺が出す」

「お兄さん仕事でしょ？ 私なら大丈夫。いつか成仏するでしょ」

「そうか……仕事がない時はこの近くの駅にいるからな」

「わかった。それじゃあ、またね」

「ああ」

それだけ言うと少女は車を降りていった。座席には五百円玉がポツンと置いてあった。

それから一週間ほど経ったある日。いつものようにタクシーに乗

ると、助手席に見知った顔があった。

「……金はあるのか？」

「払ってくれるんでしょう？」

「そうだな。行き先は？」

「うーん……決めてないかな」

「じゃあ何しに来たんだけ？」

「それも決めてない。お兄さんがお仕事してる間に決めとくね」

「シートベルトはしとけよ？」

「はい」

変な幽霊に取り憑かれたみたいだが、普通のお客さんも来たようだし、仕事するか。

誰もいないはずの助手席にシートベルトがしてある、とお客さんに怯えられたが、それはまた別の話。

了

イラスト

作品



illustration.png

シルフィイ



シルフィイ

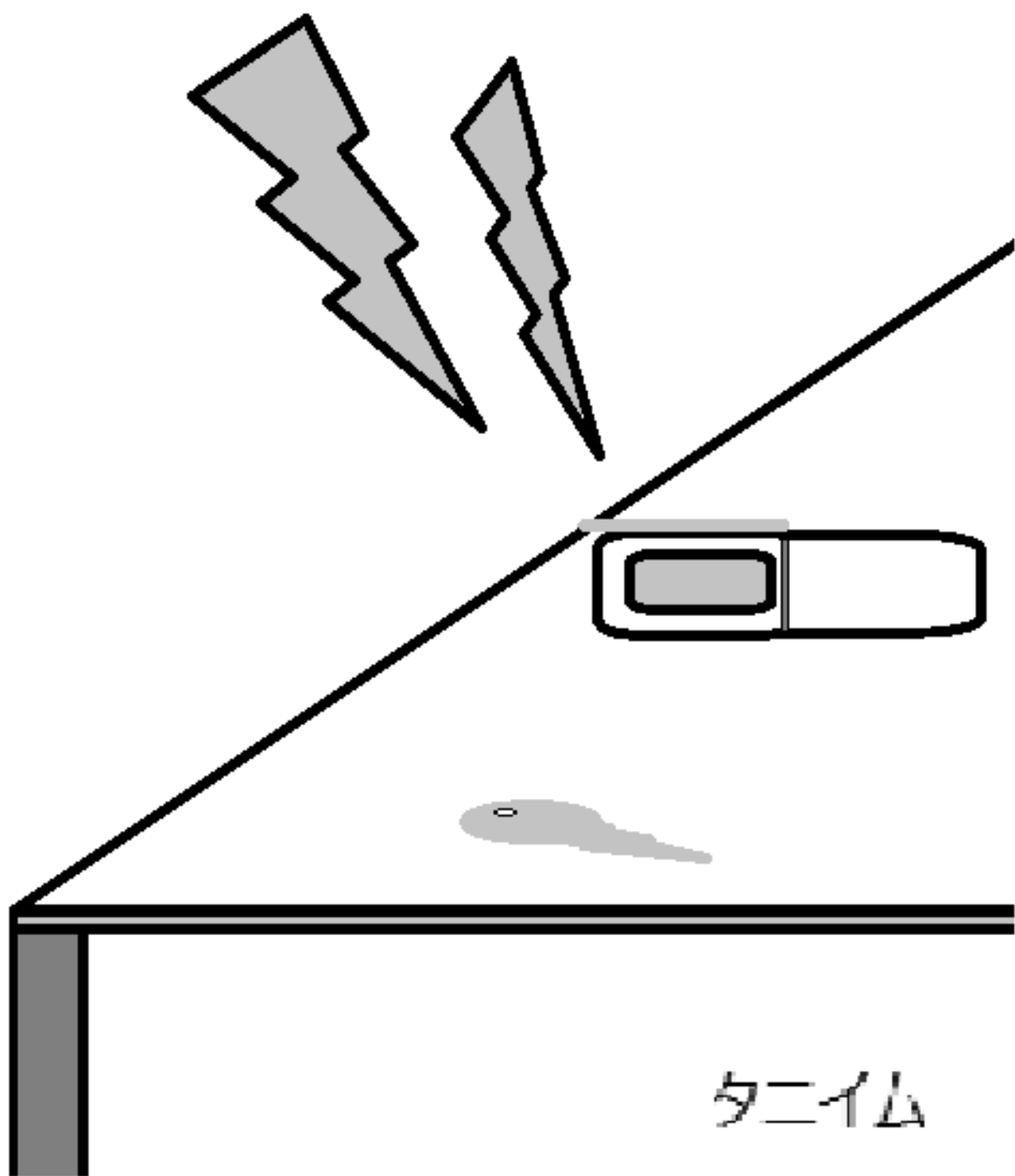


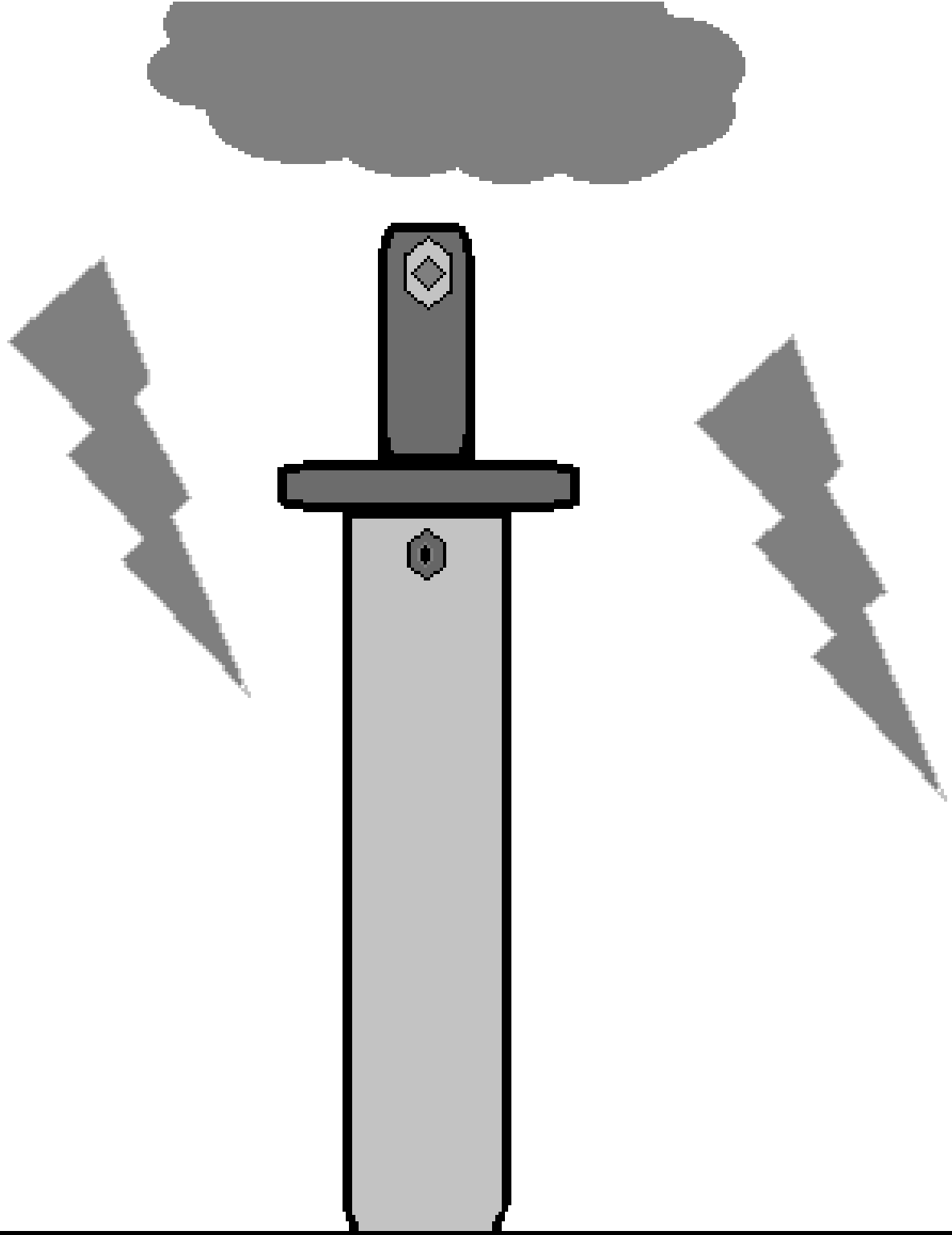


No
Face



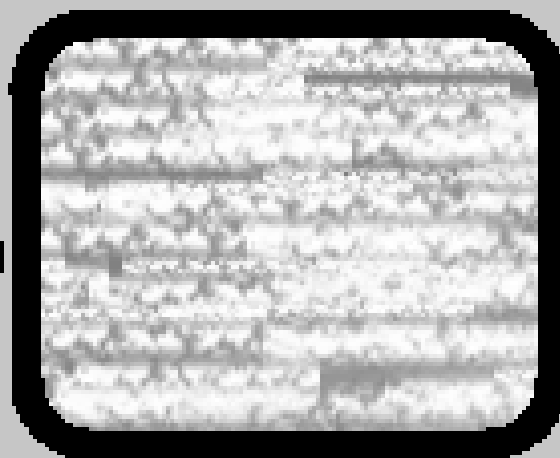
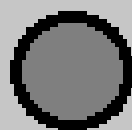
+ h

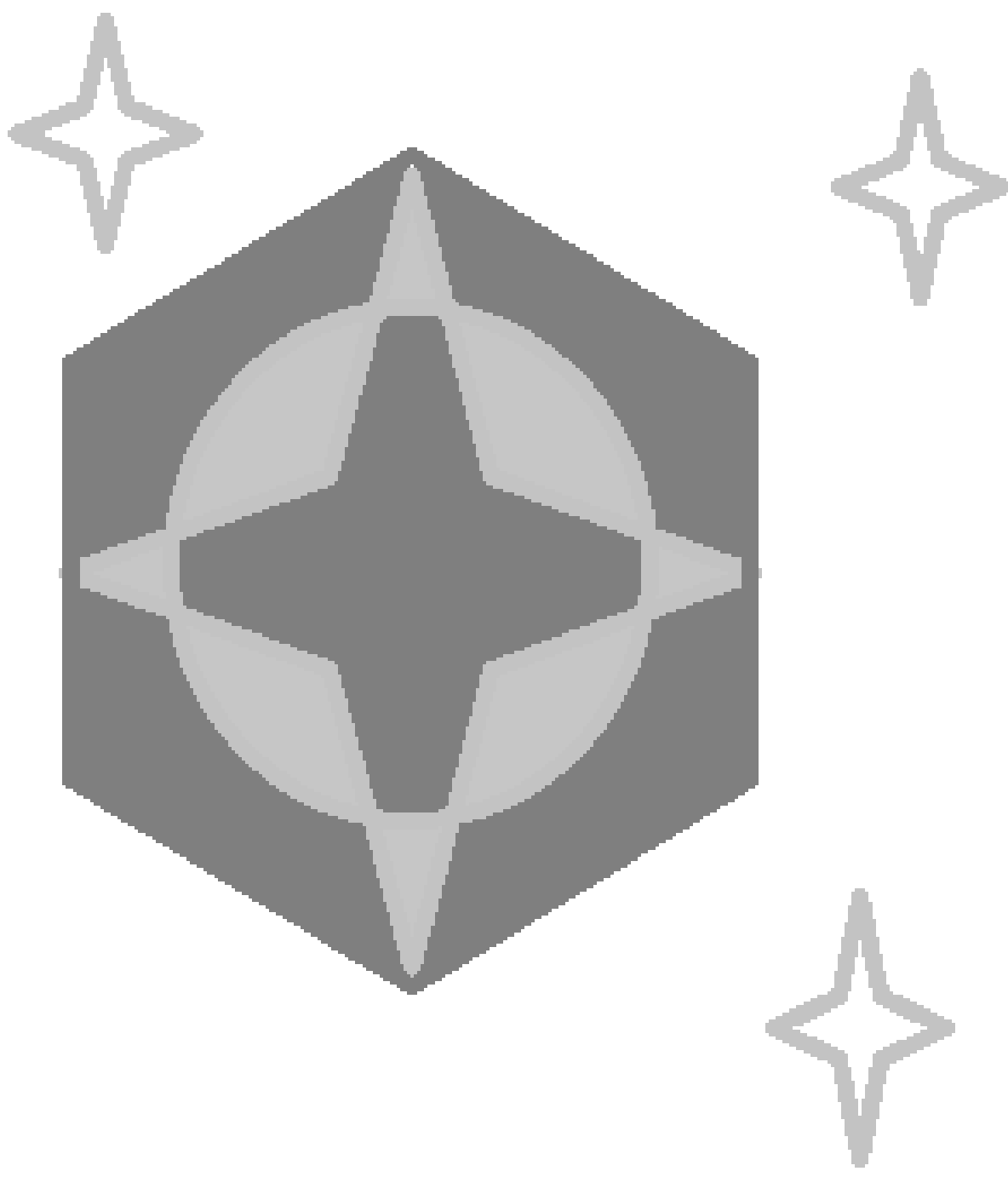




タニム

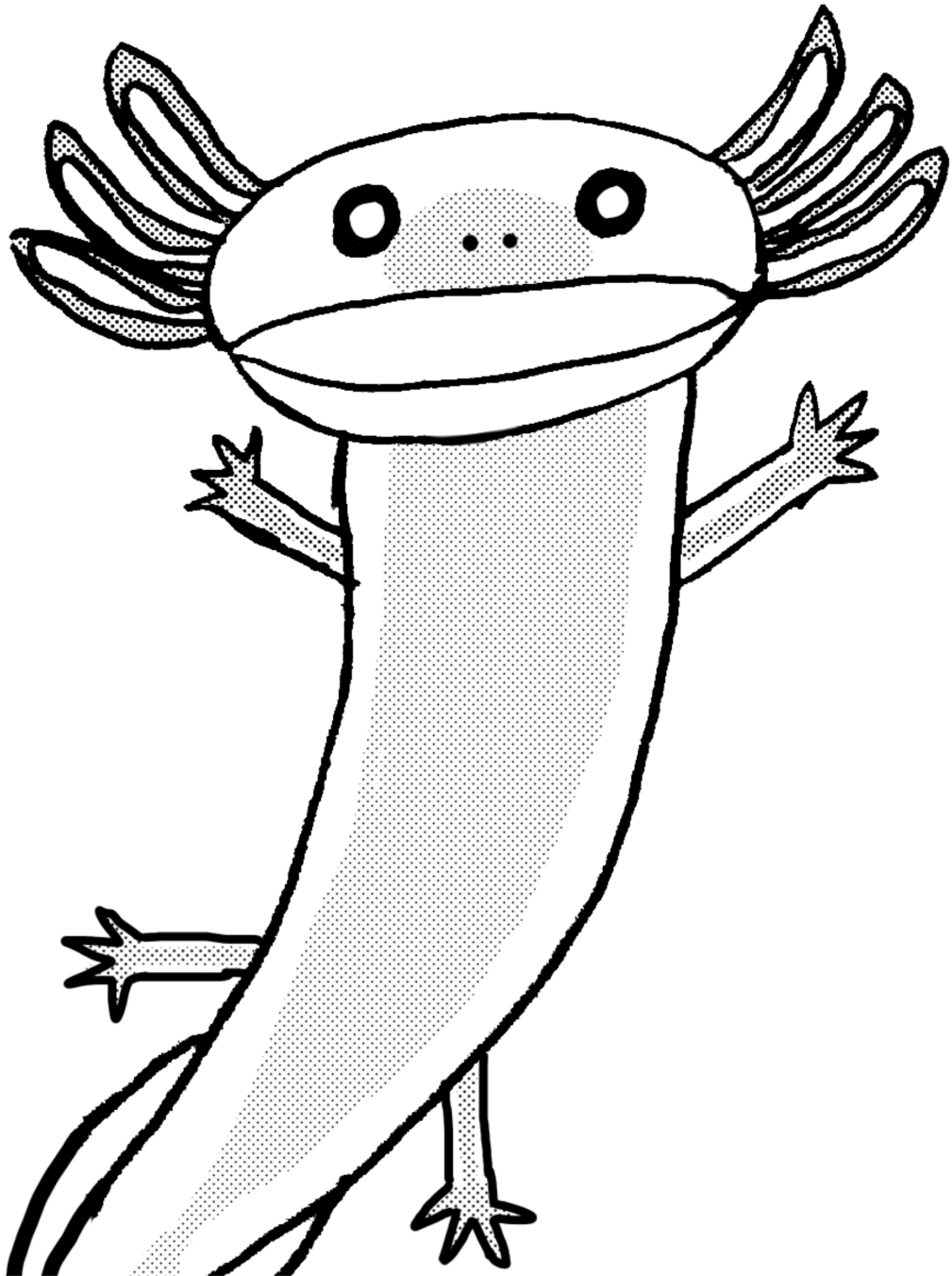
タニム





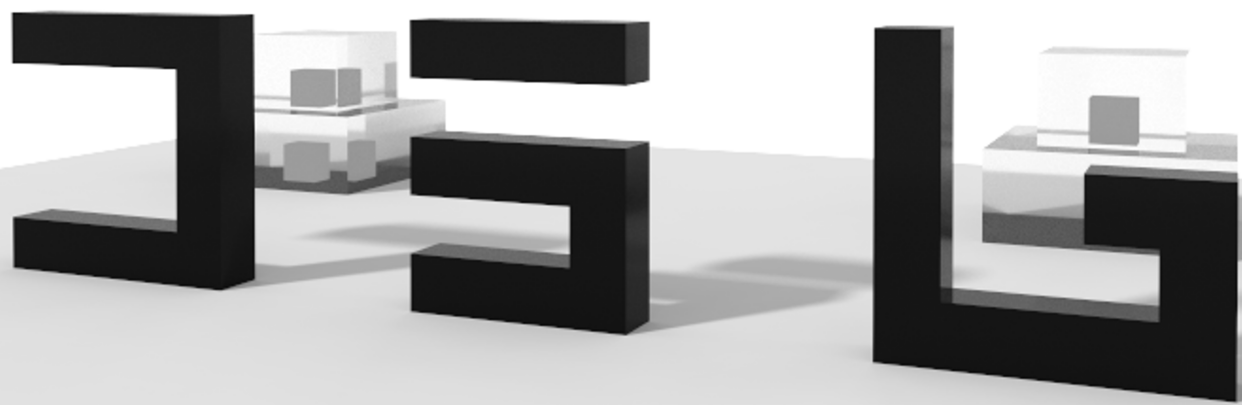
9=1A

illustration あっこどん





Mino



音楽班の活動紹介的なコラム

kuroma

こんにちは。無事に奈良高専を合格した一年生の皆さん、入学おめでとうございます。音楽班の班長をしているkuromaと申します。

さて、恐らく部活紹介でこの部誌を取ってくれた或いは配られた方は「現代視覚文化研究会」とはなんぞや？何する部活なの？ってなっていることでしょうか、他の誰かがきつと簡単に紹介してくれているだろうと思うので割愛します。

じゃあ、本題に入って音楽班の活動紹介……といっても、昨年度の音楽班全体の活動がアレンジ曲作って鑑賞会だわーい！とか高専祭でCDコンピの楽曲作るぞーウオウオー〜くらいしか無かったよねという記憶と現実を突きつけられていて悲しくなりました。

私が悲しくなっているのはどうでもよくて音楽班は基本、楽曲を個人個人が作ってそれを部の人かネットの海に晒したり高専祭でCDに収録して配布したりするといった活動をしています。

そして、班の人数（※二〇一九年二月末時点）は驚きの二人！本当に音楽班は息しているのか？と問いたくなる人数ですね…

なので、作曲・編曲に興味がある人、もしくは少し音楽経験があって作曲してみたことあるけどよく分からなかった……って方は是非！部室に来てください!!!

あ、もう既に音楽のオタクしてる人歓迎してます、オタクは好きなので。演奏者の方、軽音楽だとか吹奏楽の方に流れがち…流れがちじゃない???取り敢えず興味のある方は体験入部に来てくれると有り難いです。

紹介は多分これぐらいです。活動、少なすぎて無理。一応ここまですべてが全体的な音楽班としての活動です。次は個人的な音楽の活動について語りたいと思います。

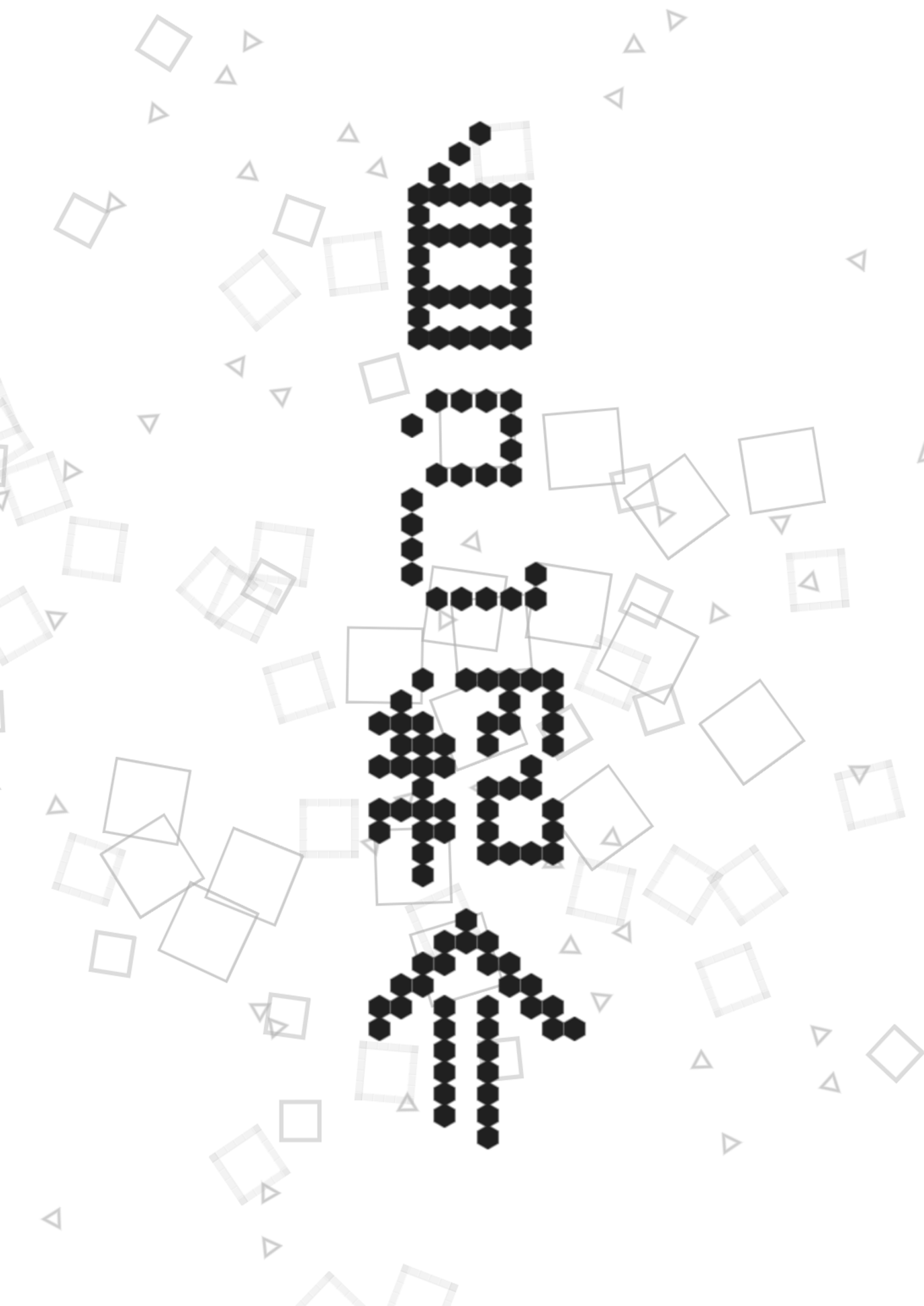
個人の活動歴としては大体一年とちよつとで特に「writer」が生息場所なので楽曲作つたぞー！聞け!!よ！みたいな感じで作品発表しててこれが個人的なオリジナル曲かアレンジ曲を発表するときです。次はTwitterをしているとやっぱりそこはネットの海なのであるテーマ・ジャンルを予め建てておいてそれに沿った楽曲を集めて主催が発表するコンピレーションのようなイベントだったりネットレベルで定期的に楽曲発表したりで色々な楽曲発表の方法がありますね…

例えば昨年度の高専祭で配布していたODを手にとつて頂いた方なら少し分かるかもしれないんですけども「Cucurrit Caelum」という曲は某学校の文化祭で音ゲー作るから楽曲提供してくれ!っていう公募に楽曲を出して実は収録されていたとかテーマは出すから二時間で楽曲作ってみようとか……色々参加していた気がします。これは私だけに限らずもう一人の音楽班員さんもこういったイベントに参加して楽曲を作るといった活動はしています。

イベント本当楽しい。参加すると人脈広がって他の方の曲聞ける発見があるので大変身体に良い。音楽的健康療法。取り敢えずオタクは同人即売会系のイベントって聞くとコミックマーケットとかwとか知ってる気がする。私も知ってる。本音を言うと「奈良高専現代視覚文化研究会」名義で実は楽曲を出してみたい。ただ最初から大型の即売会レベルに顔突つ込むのは難しいので小型の同人即売会だよなーってなっています。人、本当に来てほしい。

大体そんな感じで紹介だったり活動方針だったりを書きましたがいかがでしたでしょうか。もしこのコラムを読んで興味が出たという方が居れば大変ありがたい事だなあと思っています。そしてこのコラムなんですが一応今回は初めての部活紹介だったのでこんな感じだったんですけどももし次書くことが出来るならば秋会誌の「なげなしのかね」でもっと音楽に触れようかと思っています。

では、次回の会誌・ODでまた会いましょう!!



篝火です。

基本的に部室に顔出して帰ります。
小説班だとかほざいてますが活動
は一切してませんね.....

最近同族（造語）にイラスト道を唆
されてるかなり不安定な奴です。

活動内容ですが、

「書く（描く）」→「恥じる」→
「封じる」→「黒歴史ィィアアア」
なので、原案は有りますがその...

あまり... 聞いて頂かない方がゴニョゴニョ

兎に角！もし部室で見かけたらタ
メ語で結構ですので話し掛けて頂
けると嬉しいです。

ぞる

音ゲーを嗜むおたく。

主に幼児退行をして日々をす

ごしているらしい。

しゃかいふてきごうしゃ。

やさしくしてあげてください。

月曜日のたわわ RT bot

→ (@Zorrrrrr_7030)

HN：キツタヌ

イラスト班 班長のシルフィイです

2-Eで
主な好きなキャラはロリですねえ

チノちゃん、血小板ちゃん、
花ちゃんなどのロリ好きの君!語り合おう

- ・ 文章班
- ・ 物質科学工学科
- ・ ゲームは好きだけど苦手
- ・ 焼肉屋さん太郎が好き
- ・ タラタラしてんじゃねくよも好き
- ・ 冷やしたタフグミも好き
- ・ 本名は禿げリーゼント

kuroma

- ・基本DTMというやつをしていて、和風や懐かしのチップチューンなどが好きなのでそういったものを練成しています
- ・音楽班の班長に昇級した人
- ・部室にほとんど居ないです...
- ・実は初めて会誌のために扉絵作ったりコラムを書いたりしました。

小説班のえのぐみんです。
わかりにくい事を書いています。
よく分かってくれる方は恩人です。

3S・さん

現視研文章班所属の3Iで、編集のタニイムです
多分今年も部室の番人してると思います

こんなやつです↓

何故か小説を書くとダークな話になることに定評がある人(自称)

ここではないどこかでは「あしっど」だったり「さん」だったりする

魔女の旅々はいいぞ

主にプレイしてるゲームは
・プリンセスコネクト!Re:Dive
・Fate/GO
・ポケモン
・ドラクエ
・モンハン
・遊戯王

・マイクラフト
あたりです
とはいえ最近はこちらかといえ
ネット小説読めるほうが多いですね
主に

・フェアリーテイルクロニクル
・ありふれた職業で世界最強
・現実主義勇者の王国再建記
・ハイスクールD×D

あたりかな?多すぎて本人も把握しきれなかったりします
SNSはLINEとTwitterしかやってないです
のんびり楽しくやっていきましょう!



進捗 ダメです

しゅう 電子制御3年
現視研の会長です。
映像をつくります。



HN: あっこどん

ぽんこつの元かいちょう
刀剣とマクロスとFGOに
ハマってる

刀剣は村正派、マクロスは
フレイアちゃん、FGOはメルト
とリップがそれぞれのジャン
ルの最推しだよ!!

元々ゲームで村正にハマって
その後見に行ったミュで蜻蛉
切共々どハマりしたよ!!
ていうか一緒に観劇したり語
り合えるリア友が欲しい!!同
担ウエルカム!!他担もウエル
カム!!

フォント試めの楽しい!

TEXTER

小説班

小説班に所属していますが
ゲーム制作もやっています
最近アナログゲーム製作に
も手を出しました

今までに制作したゲーム▼
→ Lights Out Machines
→ All Tiles White Out
両方ともスマホ対応のブラウザゲーム
なので、現視研HPからプレイできます
「奈良高専 現視研」で検索してみてね

HM: 若葉

学年: 5年

学科: 情報工学科

こんな人: 時代についてい

けないついてい

く気がない人

一言: よろしくな

あとがき

新入生の皆さん、どうもこんにちは！ 現代視覚文化研究会春会誌をお手にとっていただき、ありがとうございます！

編集のタニムです！ あとがきから読むような人でなければどんな見た目かわかってくれているはず！

生身は人間ですよとかいう多分あんまり意味のなさそうな注意をしつつ、編集さんとして好き勝手しやべらせてもらいましょか。

あ、とりあえず部室にいる間は目印としてタニム着けとこうかな？

とりあえず現時点での趣味なんかは自己紹介まんまで。まあ、やりたいことが多すぎて、自分がもう一人か二人ぐらいほしくなってきました。

まあ、そんな趣味の悪い冗談はさておき、まず最初にまじめなお話からですね。

今回、作品の中にちよつとした遊びがころを入れようとして、見事に半分くらい失敗しているわけですが、まあ、こんなやり方もありますっていうのと同様な感じなのでOK！っていうのと、そのどっちもひとつの作品にまとめちゃいました……。

まあ、本命はもう一つのほうですし、実は編集さんが一番作品の提出期限が遅いのでアイデアを捏ね上げたものです……。意外と会誌に遊び心を自由にトッピングできるのは編集さんのたのしいところですね。

なんか脱線してる……。このあとがきを書いている時点で、実はイラスト作品がとて少なくて、かなり心配しています。

……ポジティブに行きましょか。というわけで唐突ですが勝手にこの場を借りて個人的な宣伝です。webサイトハーメルン (<https://syosetu.org/>) やまびこ (<https://syosetu.org/novel/176779/>) と同じくタニム名義で二次創作とか書いてます。今はまだもう一度、皆と繋がる決闘者 (<https://syosetu.org/novel/176779/>) しか作品ないんですけどね……。このタイトル

ルで完全にピンときた人は体験でもいいので現視研にお越しください。語り合える相手が欲しいんです……！（そんなことしてるから時間が足りないとかイワナイデクダサイ

まあとりあえず、ネタ切れって辛いですね……。どうにか頑張つて色々書いてます。アイデアを呼び込むために余計な寄り道をすることも少々、まあこれは必要経費のはず……！

そういう最近、二日の内一日徹夜してもう一日で半日ぐらい眠るといっても厄介な生活スタイルが出来上がってしまつていて地味につらいです。睡魔の波もそれに合わせてきてるのでどうにかしてこのループから早く抜け出さないと……。とか思つてたりします。

……。現視研は楽しいところですよ。だつて活動時間はほとんど趣味について語り合ったり、好きに絵をかいたり、ボードゲームとかトランプなんかのカードゲームをしたり、自由に楽しくやつてますから。部室に顔を出さないレアエンカウントな先輩も結構いますし……。

高専に入つてあれがしたい、これがしたい、というのも多いとは思いますが、年に千円の会費を払えば、好きな時に部室で息抜きしたり、相談したりしながら、自分の作品が本になるんですよ！

(注 作品は提出してください。)

スポーツも得意じゃない、絵も下手、文才もほぼ0、想像力(空想力?)だけが取り柄な僕でも、めちゃくちゃ楽しめてるので、ぜひ部室にお越しください。

そろそろ終わりも近づいてきましたね、最後になりますが、現視研でTwitterとかもやっています。(@mct_mv3) よろしければフォローとか飛ばしてあげてください。

ここまでお読みいただきありがとうございます。

タニム